

## 夢の譬喩について

服 部 正 明

印度大乘佛教の諸論書の中に夢の譬喩が屢々用ひられるが、それは常に非現實にして虚誑なるもの、たゞ假説せられたに過ぎないものを意味してゐる。佛教徒の用ひるこの喩説は他の哲學諸派から批判論駁を受けるが、これは大乘佛教の本質を表明する譬喩であると云つて過言ではない。然しながら大乘佛教の内部に於いても、中觀派と唯識派とは夢の譬喩の適用の仕方が稍々異つてゐる。

正理經 IV・ii・26—37 に於いて反駁せられてゐる外界の實在を否定する説が、中觀説であるか唯識説であるかに關して、宇井博士が従前の諸説を批判しつつ中觀説と論定されたのは妥當であらう。この所破の中に夢の譬喩が用ひられてゐるが、その意味内容を吟味するとき博士の論證の妥當性を支持することが出来る。反駁されてゐる説は、我々の覺 (buddhi) に對應する如き對象は何ら實在しないから、この覺は錯れる覺であると主張し、量 (pramāṇa) によつて所量 (prameya) を理解するといふ正理學派の定説に對向せしめて云へば、所量が非實在であるから量も成立せず「この量・所量の妄想は夢の對象の妄想の如くである。」(svapnavāyābhinnavat) 或はまた幻・乾達婆城・陽炎の如くである」と述べるのである。

中論觀三相品に生・住・滅の有爲三相が空なることが論證せられた最後に、「譬へば幻・夢・乾達婆城の如く、生・住・滅はその如

くに宣説せられたのである」(P. 54) と述べられてゐる。それらは「自體として生じたものでなく、現に存在してゐるのではないが、世間のよく知覺し認めるところであるから、」それら世間の人々を所化として説かれたのである、といふ意味である。中論に夢の譬喩は全く同じ意味内容を以て、觀業品最終偈、觀顛倒品第八偈に、同じく乾達婆城や陽炎の喩と共に用ひられてゐる。これらの喩は大・智度論卷六に總括して、空を解する爲の十喩として擧げられてゐる。即ち幻・焰・水中月・虛空・響・乾達婆城・夢・影・鏡中像・化の十種で、何れも諸法が眞實には實在しないこと、本來空なることを意味する譬喩なのである。

唯識派の論書にこの十喩がそのまゝ用ひられてゐる例を見出すことは出来ないが、大・乘・莊・嚴・經・論・求・法・品、攝・大・乘・論・所知・相・分・に略々同じ内容の八喩が擧げられてゐる。而してその八喩の意味内容が、夫々諸内處、諸外處、心・心所、教法等と分別されてゐる中、夢の譬喩は外の六處、即ち六種の感官に對應する對象界に關して説かれるといふのである。「外の六處は夢の如くである。それを受用することには依體が無いといふ性質があるからである。」(tad-upahogasya vāstu-katvā) (Sūtrālam. XI, k. 30 Comm.) 「對象が無いならば愛・非愛の受用をなすことは如何にして生ずるのかといふ疑惑

を除かん爲に、夢の如しといふ譬喩がある。」（攝大乘論）等と述べられる如く、夢に於いても對象が無くとも種々なる對象に關する受用がなされるのと同じく、現在我々が實在すると考へてゐる對象も實には無く、唯だ虚妄なる識の顯現に過ぎないことを夢の譬喩が意味するのである。大衆莊嚴經論、菩提分品 K. 42—44 Comm. にも「眞實の如くに虚妄の色が顯現するから身は幻の如しと遍知し、眞實の如くに錯れる領納があるから受は夢の如しと遍知し……」と述べられ、幻・夢等の喩の意味内容が八喩の分別の際に於けるものと一致してゐるのが見られる。安慧の中邊分別論釋疏 (Ed. Yamaguchi, p. 26) にも、夢中の識は以前に領納した物を對象とするとこふ説を排して、「對象なき識こそ夢中に境の顯境として生ずと決定する」と述べてゐる。

茲に中論や大智度論の夢の譬喩と、唯識派の論書に於けるそれとの間には、その適用の仕方にも相異なることが注目せられるであらう。後者に於いて夢の譬喩はたゞ識の對象界の無をいふためのみに意味が限定されるが、前者にはその限定は全くない。中論の三回の用例を見ると、觀顛倒品の場合はたしかに六種の對象界について云ふのであるが、他は心相應行法なる有爲三相、煩惱といふ心所であり、また業も少くも意業に關する限りその體は心所としての思 (cetanā) である。要するに中論は單に感官の對象界のみでなく、心・心所乃至無爲法まで凡ゆる法の本來空なることを説くのであつて、夢等の喩は皆同じくその空を解明するのみで、意味内容に相互の差別はない。大智度論の十喩もまた趣意を同じくし、一々の喩依のもつ非實在的な性格について詳細に述べてはゐるが、攝の莊嚴經論等の如き區別をなしてゐるのではない。この十喩はすべて本來非

#### 夢の譬喩について (服部)

存在であることを世間は充分に知つてゐるから、諸法をこれらに喩へて空を理解させるといふに過ぎないのである。夢の喩を釋するに當つて、夢が實事が無いのに實ありと謂ひ、無法にして見るものであることを述べた後、夢に於いても識・心の縁となる實があるといふ主張を反駁し、現實の識でも例へば二頭の人といふ語によつて二頭の人の表象を生ずる如く、自らの思惟念力によつて實には無い對象の見られることがあると云ふ如きは、唯識説に親近する考へ方であると見做すことが出来る。然し諸法を識・心に内在せしめて無自性・空を顯する方軌は、所謂中觀に於ける觀念論的傾向として六十頌如理論や大乘二十頌論などにも指摘されてゐる所であつて珍らしきことではない。(山口益、中觀佛教論攷、七七頁、Eastern Buddhist IV, 1, p. 57) 唯識説と異るのは、對象の無は識の有を意味することなく、對象の非實在は同時に主觀の虚証性を證示するものであり、兩者は俱に空であるとなす點である。大智度論の夢の解釋も、その點から見るとき中觀的であるといふことが出来る。

唯識派が對象界の非存在を主張するに際して、夢の譬喩は最も適合性を有してゐたと考へられる。而して夢の譬喩が唯識派に適用せられたとき、その意味内容もこの學派の所説に従つて限定せられたのであらう。唯識説は唯だ識のみにして對象が無いと説き、我々の認識に執着する對象はたゞ識の顯現に過ぎないといふ。識は非眞實な對象認識の現實的な根據、虚妄分別 (abhūtaparikāṣa) としてあるのである。我々は夢中の對象界の非實在を充分知つてゐる。然し夢の中にある限りそれらを恰も實在するかの如く受用してゐる。かゝる錯謬の根據が夢中の識である。夢中の識は本來的には非眞實であるに相違はないが、而も現實的には對象の無いところに對象の

## 夢の譬喩について（服部）

形相を顯はし出す特性をもつてある。この夢中の識が虚妄分別と構造を同じくし、外の對象界の無を證成する喩として用ひられるのである。唯識二十論には唯識説に對して四種の論難が示されてゐる。

對象が無ければ認識する處の決定・時の決定が無いといふこと、認識に普遍性が無く夫、この個人に限られたものとなるといふこと、及び作用が成立たぬといふことである。第三を除く三難に世親は夢の譬喩を以て答へ、夢に於いてそれらの事が成立つことを論じてゐる。即ち茲では夢中の識の虚誑性が示されたのではなく、却つて夢に於いても非實在の對象が恰も實在するかの如くに、認識が成立つといふことが論證されたのである。

唯識説に於いても識は勝義的な實在ではない。對象の非實在なることの自覺は能取の識の根據を轉換させて無分別智を成就する。この能取の識の虚妄性を、夢から目醒れた時に知られる夢中の識の虚妄性を以て喩へることは勿論妥當である。然しそれはむしろ中觀説に於ける夢の譬喩の適用であつて、唯識派の論書に於いてかゝる意味で夢の譬喩が用ひられることはない。それは常に對象無くして認識・受用が成立つことをいふ譬喩として定型化されてゐるのである。中觀が夢を本來的な無に於いて解し、諸法の本來性なる空性を喩へたのに對して、唯識派は夢の現實的な有の根據を夢中の識に求めたのである。それは非本來的な直接態としての有を空性に媒介する入無相方便として施設せられた有であり、覺醒すれば確かに非存在ではあるが、夢みる限り對象の無いところに對象を恰も實在するかの如く顯現せしめる因相をもつものである。（右の如き兩派の相異は、更に中觀派の清辨や月稱が唯識派の夢中の識の喩説を論駁してゐる箇處に一層明らかなであるが、茲には省略する。山口益、無と有

との對論、二二九頁以下参照）

夢の譬喩に關する中觀・唯識兩説の解釋の相異を認めた上で、先述の正理經の所破を見ると、夢に喩へられたのは量と所量であつて單に所量のみではないことが注意せられる。この所破が唯識説でないことはこの點からも亦明らかであるといふことが出来る。之に對して唯識二十論に「現量の覺は夢等の如し」（k. 16）といふ場合は、現量の覺が實在論的には成立し得ず、對象が實在しないといふ唯識説によつて成り立つものであることを證するのである。

幻喩、金土藏の喩、或は蛇と繩の喩等が三性説を證成する譬喩であるとすれば、夢中の識の喩は識論を成立せしめる譬喩として、唯識派に於いて最も多く用ひられたものと思はれる。そのことは清辨や月稱の論駁の外に、蓮華戒が攝眞實論の註の中に引く唯識説批判者 Śubhagupta の説の中にもこの譬喩が擧げられ、その他シャバラスヴァーミンの彌曼陞經註に引かれた Vṛttikāra の説 (I, i, 4)、シャンカラの吠檀多經註 (II, ii, 28-32; Bṛhadāraṇyakopaniṣad 註も同じ) 等が唯識説を批判する場合、必ずこの夢の譬喩を擧げて反論してゐることから見て明らかであらう。論難に共通するのは、夢の識の成立を以前に經驗せる對象認識に基づける心理學的な立場で、勝論、正論學派もその點同一である。而して現前に對象をもたぬ夢中の識は、覺醒時に否定せられる不確實なものであるが、實在する對象をもつ覺醒時の意識は、夢と性質を異にする確實なものであるから、夢の識を以て喩説することは出来ないとなすのである。それは夢の譬喩としての意義を、従つてまた對象の認識・受用を執着として、それからの離脱を意圖する大乘佛教の立場を、本質的に否認するものであることを示すであらう。